

九州大学百年史 第8巻 : 資料編 I

九州大学百年史編集委員会

<https://doi.org/10.15017/1448763>

出版情報 : 九州大学百年史. 8, 2014-05-30. Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

第二章 農学部の創設

第一節 農科大学設置運動

一七一 農科大学の設立を主張す

『福岡日日新聞』一九一五（大正四）年一月二〇日

○農科大学の設立を主張す

九大総長 眞野工学博士談

▲即位式記念事業 諒闇明けての晩秋に於て御即位の御大典京都に行はるゝ事となり、国民は此の一世一代の御大典を記念せん為め記念樹、記念林、図書館、公園其の他種々なる記念事業の計画中なるが、何れも其の最も適切なるを賛す。されど一体我國民の事を為すや総て小規模なる傾あるは遺憾にして、我が国今日の地位としては今少し何事にまれ大規模に計画せざる可からず。我が福岡の記念事業は果して如何なる計画あるか未だ知らざれども、吾人は茲に大都市福岡の記念事業として相応しき農科大学の設立を提案主張せんとす。

▲歐洲諸国と學術 今や歐洲は古今未曾有の大動乱にて各国共一方ならぬ困憊を招きつゝあるが、将来を見るに卓絶なる歐洲人は此の大戦乱中にも拘らず早や平和克復後の自國家の發展を如何にす可き

かを思慮する事最も痛切にして、安逸の如きは衰へたる國運の挽回策に付き其の方法の研究に腐心しつゝあり、又英國の如きも其の國富の回復に付き近時盛んに國民の學術其他の事に關する研究の今尚不熱心なるを叫び、如何なる巨費を投ずるも惜む所なく今一層の學術並に實業の發展を期せざる可らずとせり。又普く世人の知る所なるが、安逸の學術並に實業方面の研究に努力するは実に他國の遠く及ばざる所にして、一例を挙げれば一小会社にて数十名の學士を雇備する位にして、彼の色素の研究等に至りては一日一色素を發見すると言ふ猛烈なる勢を以て為したる為め、英國印度殖民地の天然藍の如きも全く安逸の人工色素の為めに庄倒せられ、日本の四國の藍の如きも矢張り之が為めに其の販路を失ひたりと言ふにあらすや。彼の先進國の英國に於てさへ戦後國運の挽回發展の為め万有る學術の研究を擴張する事の緊急務なるを絶叫しつゝあるを思へば、我が國民たる者又茲に一大奮起せざる可らず。

▲國富充実と大學 目下我が國の學術を初め、化学工芸にあれ鉅業にあれ既に外國模倣の時期を過ぎたるのみならず、戦後に於ては如何にもして獨立せざる可からざるの已むなきに至れり。されば此の際我國に於ても大に覺悟する所なかる可からず。殊に國富の充実は

之我国民の最も注意す可き点にして、実業方面の発達にし大努力せざる可からず。之より論ずる時は理工農科の大学の数を増設して此の方面の研究に努力せざる可らず。目下我国農科大学は北海道東京の両大学なるが、農学の研究上北寒地、中央地、及び暖地方の三区に設くには非常なる便利を有す。殊に農工医三科は研究上密接関係ありて、農科の獣医、農科中の耕地整理と工科の土木等との関係の如きは又特別にして、三者を合置する事は綜合大学として最も必要なり。一分科大学の設立に要する経費は約百万円なるが、最初は完全なる者を設立するよりは農科中の獣医科或は林業科等の一部より計画し漸次完成せしむるを上策とす。斯くすれば其の経費等も比較的多額を要する事なし。若松の安川氏の如きは現金九十万円公債二百四十万円を寄附して明治専門学校を設立して其の国家に貢献する所多大なるは万人の認むる所なり。又古川氏は工科大学の建物全部を寄附して永久に其の芳名を残すに至れるは実に羨望に堪えざる所なり。福岡地方には大実業家富豪少からず、若し之等篤志の人よりの寄附を仰ぎ、之れに政府の補助を得んか、一農科大学の設立や決して難事に非ずと思ふ。九州の大都市否天下の大都市を以て自ら任ずる福岡市が曠古の大典に際し為す可き記念事業は宜しく此の位の大規模の計画に出でざる可からず。福岡市民請ふ奮起せよ。

〔註〕 原本に句読点追加。

一七二 農大と福岡県

〔福岡日日新聞〕一九一六（大正五）年七月二〇日

○農大と福岡県

明年度文部省予算新事業中にて最も世間の注目せるは札幌農科に医科を附設する北海道大学独立と東北大学工学部を工科大学に引直並に九州農科大学増設問題なるが、札幌農科に医科を増設するか否かは研究の余地ありとするも、財源も早や充分なる今日増設には文部省当局も何等の異議なしと見へ、小山文部副参政官は曩に実地の調査を為したるが、東北大学の工科増設は尚ほ研究問題なり、蓋し同大学の医科の完成を見ざる今日に於て工科を増設するはまだ少々早計と言はざる可らず。然らば九州農科大学の増設は如何。九大医科の建物に於て幾分改築す可き点なきにあらざるも先づ現在のまゝて何等の差支を見ず。將に工科の如きは最も完備の域に達し、又教授連に於ても学界の重鎮人物少からず。茲に一農科の増設せられんか、医工両科と相待ちて益々綜合大学の効果を發揮するを得るは茲に贅言を要せず。抑も綜合大学に於て最も密接の関係を有するは理工医農科にして文科法科兩科は単独としても多く差支なし。完全なる前記四大学にして併して完備せられんか、大学としては申分なきに庶かし。北部札幌農科、中部東京農科の二農科に対し、今南部九州に一農科の増設は、学問上より論じて必要なる事は屢々論述したる所なるが、唯茲に一問題と云は九州の何処に設立するやにあり。本問

題に就き鹿兒島にては高等農林学校を大学に昇格せんとする運動あり。長崎控訴院移転問題に聊か失望したる佐賀にては最も宿縁深き大隈首相、武富通相の在任中に一大運動を試むるの決議を為し、曩に開会したる臨時県会に於ても敷地寄附の条件にて同大学設立請願の建議案を可決し、松浦専門学務局長が九大卒業式に臨席したる當時も石橋佐賀知事は秘密裡に意見を陳請し、聞く処に依れば早や文部省に建議案を提出したる由なれば、今秋議會には必ず同建議案の提出せらるゝは明かなる事實なるが、我が福岡県に於ても有志の尽瘁する所尠からざれば、福岡県よりも同校の建議案は提出するに至る可く、隣県佐賀に於て此の熱心なる運動あり、我福岡県民も此の際奮起せずんば可惜当然得らる可き農科大学も他に奪はるゝ事なしとも計られず。福岡県教育会、県農会、県会の奮起するに共に一面県下有志の起るありて、最も之れが速成の必要条件たる創設費の寄附に努めざる可からざるが、此の際文部当局の最も注意すべきは、斯の種の設備に対し官公署学校等の分布や地方観念を聊かたりとも容る可き性質の者にあらざる一事なり。

〔註〕原本句読点なし。

一七三 農科大学設置に関する建議

『福岡日日新聞』一九一六（大正五）年一〇月三日

農科大学設置に関する建議

九州帝国大学に農科附設の急務なるは喋々を要せざる所なり。而して綜合大学と単科大学とは其経営の難易効果の厚薄世既に定論あり。殊に農科の学たる万有科学に關係を有し、獣医学の医科に於けるは勿論、醸造化学の如き農業土木の如き農具工学の如き共に工科に密接の關係を有す。且つ既設の医工兩大学亦農科に負ふ所少からざるを以て、之が福岡の地に設置せらるべきは敢て疑を挿むの余地なきも、設立費の財源は未だ以て政府の認定する所とならず、而も之が争奪戦の端緒は既に各地に発現し、激烈なる運動の開始せらるべき傾向あり。之れ其設置の直接間接に地方を裨益すること多大なるを以て、各県が大局の利害を顧みるの余地なき亦止むを得ざるものあり。若し自然の形勝に忤れ之を放任せんが、当然の理敷却て群議の排する所となる無きを保せず。依て本県に於ても機宜を誤らず適當の措置を取てし、速に之が設置を見る様充分の企画あらんことを。茲に本会の決議により謹んで及建議候也。

〔註〕原本句読点なし。

一七四 農大問題再燃

『佐賀新聞』一九一七（大正六）年八月二日・三日・五日

農大問題再燃

併而高校増設問題

県民の奮起を促す

文部省にては目下大正七年度予算編成中なるが、同年度の同省所管新事業としては東北帝国大学の拡張并に各直轄学校の新学科設置等種々計画されあるも、最も重要事業の一として数へらるゝものは実に九州帝国大学に農科大学新設の問題とす。而して更に此帝国大学大拡張に關聯し來るべき臨時教育会に高等学校二校以上の増設案提出に決せることなり。

農科大学設置に關する文部省の計画案に依れば、向ふ七個年繼續事業として、初年度に於ては土地の選定購入、校舍及器具の一部設備に止め、年度を逐ふて完成せしむるの方針にして、其設置場所に關しては文部省側に二様の説ありて、一は九州帝国大学所在地たる福岡より二里以内の地点に設置すべしとなし、他は農科大学は現在の九州大学と遠距離に建設するも教授上其他何等不便を感ずるが如きことなきを以て、寧ろ九州に於ける中央地点にして全国有数の農産地に設置すべしと云ふにあり。

次に高等学校増設問題は今漸やく臨時教育会に提出する程なるを以て未だ的確なるものとは云ひ得ざるも、現在に於てすらも高等学校収容力に大不足を感じ、本年の如き入学志願者一万八百余名なるに対し入学許可者二千八百十三名にして、入学志願者数の僅々二割を収容し得るの有様にして、而も東北、九州両大学の拡張に至らば愈々高等学校増設の必要あるを以て、教育会は文部省よりもより以上に増設の必要を感じ居るべければ、高等学校の増設さるべきこと

は疑ふの余地なし。而して愈々高等学校増設さるとせばその地点は何れなるかを想ひ見るに、従来高等学校収容力不足の爲めに變則的に設けられたる札幌農科北海道医科の附属予科が何れも増設の高等学校に統一せらるゝ事よりして、北海道にその一つが設置せらるゝことは疑ふの余地なきも、残る他の一校乃至二校の設置地点は九州なるか、關西なるか、將中国、関東なるか全く不明なれども、一説には一校は必ず九州なるべしと云ふる者あり。

吾が佐賀県に於て農科大学設置問題の起りしは一昨年通常議會開會前の事にして恰も吾が佐賀県は県會開會中にして、県會は直に之れが協議會を開き当局に対し請願書を提出したり。当時吾輩も本県が全国に於ける有数なる農産地よりし且つ郷土的見地及び九州に於ける他県との比較均衡上よりして農科大学は必ず本県下に設置すべしと爲し、本県民は一致團結之れが爲めに大々の運動を開始するの必要あることを高唱力説したり。而して今や此農科大学問題は再燃し、而も九州の一地点に全大学を設置することは殆んど確定的のものたるに於ては吾輩前来の言責上よりしても断じて黙視すべからざるは勿論、本県々會とても従前の引続き上速かに之れが運動を開始するの必要あり。併せて県民も同一致合体之れが爲に大々の運動を開始するの必要あるなり。況んや今回は農科大学問題に加ふるに更らに高等学校問題のあるに於てをや。

農科大学設置条件に關しては他の専門学校設置条件と大いに趣を

異にし、広大なる林野と田畑とを最大要件とす。然るに本県は彼の背振の深林を有し、三養基郡に原野を有し、田畑に至りてはその好むが儘に委せあり、而も地価に於ては福岡県の如く工業地として比較的高価なるに比し甚だ低廉なり。加之学校設置の根本問題として吾人等の閑視すべからざるものは学校と周囲の境遇なり。商業学校には長崎、神戸、大阪の如く商業的零囲気が必要とし工業学校には福岡、大阪の如く工業的零囲気を必要とす。同様に農学校には全国に於ける主要産地たる熊本、佐賀、岡山の如き農業的零囲気が必要とするなり。殊にその如何なる種類の学校にせよ将亦中学と大学たるを問はず、学校設置場所は大都会地たるより寧ろ堅実なる小都会地を適當とするが如し。大阪に於ける学生氣風が最も懦弱せるが如く福岡に於ける学生氣風も漸次懦弱しつゝあり。吾人が大阪に行き奇態なる学生氣風を見ると同じ程度に於て福岡に於ても必ず之れを觀取するなり。福岡には商業学校、工業学校は或は設置すべき資格ありとするも、農学校其他の学校設置の資格は今や殆んど欠如し居れり。況んや高等学校の如きは如何なる理由ありとも断じて設置すべき処にあらざるなり。

吾が佐賀県は由来葉隠精神なるものを確保す。佐賀人の血管には今も尚ほ此赤血球は滾々として漲り、他の何れをも企及し得ざる或る大なる特長を有せり。故に佐賀人は何れの土地に至るも常に佐賀人たるの特長を發揮してその異彩を放つ。試みに本県出身先輩の何

れの人々に見るも彼等は佐賀人の佐賀人たることを發揮し、葉隠の氣風、葉隠宗に如何に精練され、齟齬じたるかを觀知し得べし。

佐賀は確に修養の土地にして、子弟を教養するの土地たり、学生の学修すべき土地たるなり。蓋し之れ我田に水を引かんとするの說には断じてあらずして仮令我田引水の說なりとするも、吾が佐賀県は九州に於ける他県との均衡上よりするも本県下に専門学校程度の学校を設置することを当然の權利とするものなり。福岡に九州帝国大学あり、熊本に第五高等学校、高等工業学校、医学専門学校あり、長崎に高等商業学校、医学専門学校あり、而して鹿児島に第八高等学校、高等農林学校あるに、吾が佐賀県と大分、宮崎両県に一の専門学校程度以上の学校なく、而も大分、宮崎に至つては地余りに辺陬なりと云ひ得べくも、本県に至りては九州の中央部を占め居りながら一の専門学校程度以上の学校なしと云ふに至つては、当局は本県を侮辱するものなると共に、それだけ本県の大なる恥辱たらずんばあらず。

九州に於ける他県が一学校乃至三校高等学校程度以上の学校を有するに拘はらず、独り本県が之れを有せざる事は県民それぞれ自身が斯かる事を余りに重要視しせざりしに帰因すること大なりと雖も、更らに本県出身の先輩が決して愛郷の精神に欠如せりとは云はざるも単に郷里を愛するのみにて、郷里をして改発し、隆盛ならしめんとする積極的愛郷心に欠如せることが大なる原因たらずんばあらず。

学校を設置することの経済的利益、若くば体面上の理由は暫らく措き、学校所在地々方が精神的に如何に感化され改発する、かは吾人の意想外とする処にして、思想の比較的進歩せる彼の東京に於てすらも所謂学校圏なるものを生じ、帝国大学所在地たる本郷は帝大的色彩を帯び、早稲田大学所在地たる牛込は早稲田的色彩を帯び、而して慶應義塾所在地たる三田は矢張り慶應的色彩を帯び居ることは何人と雖も直に観取する処にして、それだけ学校なる者が、精神的に如何に感化するかを知るものなり。佐賀が所謂佐賀気質なるものを有し、堅実なりと雖も、余りに保守的にして、時代精神より二年三年乃至五年も遅れつゝある所以のものは、一は是等高等学校以上の学校が存在せざることに帰するものなり。

然り而して農科大学、若くは高等学校設置が経済的に利益する事も決して尠少ならず、従来県民が以上の学校に入学せん為めには東京、乃至熊本と云ふが如く他地方に遊学したる者の学費が少なくも減少さるゝは更なり、尚ほ高等学校若くは農科大学とすれば少なくとも四百名内外の生徒を收容するを以て是等生徒より一ヶ月平均一人十五円の学費を消費するとするも、四百名にて一ヶ月六千円、一年七万二千円にして、一個聯隊の営所が存在するよりも経済上よりすれば却つて利益たるなり。況んや県としての体面、三十五万七千石の旧大藩たる面目上よりして当然本県下に一の農科大学か、さもなれば高等学校は必ず設置せざる可からざるの理由あるなり。

文部省は九州帝国大学内に農科大学を設置する事は殆んど確定的のものとなり居り、高等学校も又九州の何れにか設置せらるべしと云ふ。吾人佐賀県民は九州に於ける他県との均衡上、三十五万七千石の旧大藩たる体面上、如何なる理由ありと雖も農科大学か、さもなれば高等学校は必ず本県下に設置するやう全努力を傾注せざる可からず。蓋し此事は県将来に対する吾人の大なる義務にして且つ当局に向つて主張すべき当然の権利たるなり。(北山)

(註) 原本に句読点追加。

一七五 自大正七年度至大正十二年度福岡県教育寄附金継続年限及支出方法

〔大正六年福岡県通常県会決議録〕

第八号議案

自大正七年度 福岡県教育寄附金継続年限及支出方法
至大正十二年度

教育寄附金中

一金百参拾四万八千円

農科大学設立費寄附金

内

金式拾貳万五千円

大正七年度支出額

金式拾貳万五千円

大正八年度支出額

金式拾貳万五千円

大正九年度支出額

金式拾貳万五千円

大正十年度支出額

金式拾貳万四千円

大正十一年度支出額

金式拾貳万四千円

大正十二年度支出額

右農科大学設立費寄附金ハ六ヶ年度継続トシテ支出スルモノトス
但シ国庫ノ都合ニ依リ各年度ノ支出額ヲ増減スルコトアルヘシ

大正六年十一月十七日提出

福岡県知事 谷口留五郎

説明

九州帝国大学ノ一分科トシテ農科大学ヲ大正七年度ヨリ本県ニ
新設セラレシコトヲ要望スルノ趣旨ヲ以テ之ヲ国庫ニ寄附セン

トスルニ由ル

右原案ノ通り決定

一七六 農科大学設立に関する衆議院予算委員第一分科会質疑

〔第四十回帝國議會衆議院予算委員第一分科會議録〕

第二回 一九一八(大正七)年二月二日

○志々目藤彦君 私ハ当局者ガ本年度ニ於テ、農科大学ヲ九州ノ方
ニ設立サレルコトニナリマシタ、其事ニ付テ一寸参考ニ文部大臣ニ
御聴シタイト思ヒマスガ、文部省ガ今日此大学ヲ設置セラル、ニ当
リマシテ、綜合制度ト云フモノヲ本トシテ、之ヲ完成スルト云フ上
カラ、此度ノ農科大学ヲ福岡ノ方ニ設置サル、ト云フコトニナツタ
ノデアリマセウカ、若シソレヲ綜合制度ノ上カラシテ、福岡ノ方ニ

設定サレタト致シマスルナラバ、一番此綜合制度ノ完成ハ、最モ手
近デアリマス所ノ京都大学ノ方ニ、之ヲ設置サル、方ガ相当デハナ
イカト思ヒマスガ、之ヲ先ヅツ伺ヒタイノデアリマス

○国務大臣(岡田良平君) 綜合大学ノ完成ニ付テ、先ヅ京都ヲ完
成シテ、ソレカラ後ニ九州ニ及ブト云フノガ順序デハナイカト云フ
御尋デアリマスガ、是ハ当局者ノ今日迄執リ来ツテ居ル方針ハ、必
ズシモ近い所ヲ先ヅ完成シテ、而シテ後ニ速キニ及ボスト云フコト
デハアリマセヌノデ、種々ノ便宜、或ハ希望者ノ状況、其他様々ノ
事ヲ調べテ、或ハ今年ハ東北ノ方ニ向ツテ擴張ヲ図リ、来年ハ九州
ノ擴張ヲ図ルト云フヤウナ工合ニ、各地ニ及ボスノデアリマス、片
一方カラ片ヲ付ケテ行クト云フコトニハ致シテ居リマセヌ、京都大
学ニ付テハ、本年ハ生物学ニ付テノ施設ヲ擴張シテ居リマス、東北
大学ニ付テハ工科大学、北海道ニハ医科大学、九州ニハ農科大学ト
云フヤウナ工合ニ、今回ハ多少ノ擴張ヲ図ルヤウニ致シテ居リマス、
ソレガ為ニ自然農科大学ヲ九州ニ持ツテ参リマシタノモ、斯ウ云フ
事情デアリマス

○志々目藤彦君 ソレカラモウツ御尋シタイノハ、農科大学ノ設
置ト云フコトハ是ハ当面ノ急務デアリマシテ、一年デモ早く開設ヲ
希望シテ居ラレルト云フコトデアリマスルガ、果シテ左様デアリト
致シマスレバ、此高等農林学校ノ如キヲ昇格サシテ、農科大学トナ
ス方ガ最モ捷徑デハナイカト思フノデアリマス、私共ノ聞キマスル

所デハ、新タニ農科大学ヲ設立スルト云フコトニナルト、少クトモ数年後デナケレバ、学生ヲ收容スルコトガ出来ナイト云フコトヲ聞イテ居リマス、若シ之ヲ高等農林学校ヲ昇格スルト云フ方法ヲ採リマシタナラバ、本年デモ学生ヲ幾分ナリトモ收容スルコトガ出来ルト云フコトデアリマスルガ、当局者ハ此辺ノ事ニ付テハ、御調査ハ為サレタノデアリマセウカ、ドウ云フモノデアリマセウカ、ソレヲ一ツ……

○国務大臣(岡田良平君) 御話ノ通りニ、高等農林学校ヲ昇格セシメマシタナラバ、新タニ農科大学ヲ設置スルヨリハ、手早ク学生ヲ收容スルコトガ出来ルト云フノハ事実デアリマス、併ナガラ農科大学ト云フモノハ、中学校ヲ卒業シテ、更ニ三箇年ノ高等学校ヲ卒業シタ者ガ入学スルノデアリマスカラ、縦令本年其設置ニ著手シタ所ガ、本年直チニ生徒ヲ容レルト云フコトハ、生徒ノ種ガアリマセヌノデ、ドウシテモ三年ノ後デナケレバ、生徒ヲ收容スルコトガ出来ヌノデアリマス、唯今急ニ農林学校ヲ昇格セシメタ所デ、收容スベキ生徒ガ無イト云フコトニナルノデ、一日モ急ヲ要スルト云フコトハ御同感デアリマスルガ、夫故ニ農林学校ヲ昇格スルト云フコトヨリハ、寧ロ別ニ農科大学ヲ設置シタ方ガ宜カラウト云フコトニ考ヲ定メタノデアリマス、ソレカラモウ一ツニハ農科大学ノ必要ハ極メテ急デアリマスルケレドモ、ソレト同時ニ農林学校ノ卒業生モ、今日成ルベク多数ニ供給シタイノデアリマス、此方ノ需用モ甚ダ急

ナルモノガアリマスルカラ、農林学校ヲ昇格セシムルト云フコトニナレバ、即チ農林学校ノ卒業生ガ無クナルト云フコトニナリマス、矢張此方ハ此方トシテ成ルベク發達セシメ、拡張セシムルト云フコトニ致シマシテ、農科大学ト云フモノハ別ニ設置スルト云フ方ガ宜カラウト云フ斯ウ云フ考ヲ致シタノデアリマス

○志々目藤彦君 ソレカラ又農科トカ、商科トカ、或ハ工科ノ如キハ、所在地ノ狀況トカ、風土トカ、氣候等ト、最モ密接ナル關係ガアルノデアリマスカラ、此地理的關係トカ云フ事ヲ考慮セラレタモノデアルカ、若シ此地理的關係ヲ御考慮ニナリタルモノトスレバ、先ヅ譬ヘテ申シマスレバ、鹿児島ノヤウナ、内地ノ海陸動植物ハ勿論ノコト、坐ナガラニシテ熱帯ノ動植物、氣候、或ハ農事ト多大ノ關係ノアリマスル所ノ、潮流ノ研究調査等ヲ為シ得ル所ノ、独特ノ材料ト云フモノガ揃ツテ居テ、殊ニ近時國民ノ南方發展ト云フコトハ、實ニ眼前ノ事実デアツテ、今日カラ将来ニ向ツテ、更ニ大ニ奨励スベキモノデアルト考ヘルノデアリマス、又唯今占領シマシタ所ノ南洋ノ諸島ハ、戦後ドウ云フコトニナリマスルカハ、是ハ別問題トシマシテモ、今ヤ國民ノ南方研究ト云フコトハ、唯ダ机上ノ論ノミデナクシテ、現実ニ抱負経綸ノ基礎ヲ進メナケレバナラヌト云フノガ、国運ノ大勢デアルノデアリマス、此秋ニ方ツテ鹿児島ノ高等農林学校ガ、今日迄非常ニ苦心慘憺シテ研究調査シテ居リマスル、有力ナ材料、独特ノ資料ヲ繼承シテ、ソレヲ基トシテ大学ニ昇格セ

シムルト云フノハ、国運ノ大勢ニ順応シタ、適切ナ施設ノヤウニ思ハレルノデアリマス、殊ニ初メ鹿児島ニ農林学校ヲ設ケマスル時分ニ、風土氣候等ノ關係ヲ調査研究セラレマシテ、最モ適切ナリトシテ鹿児島ニ設立ニナツタヤウニ記憶シテ居ルノデアリマス、ソレデ是等ノ点ニ付テハ、大臣ニ於テハ何カ鹿児島ノ高等農林学校ト、今申シマシタヤウナ關係ニ付テモ、十分御考慮ニナツテ居ルノデアリマセウカ、此点ヲ伺ヒタイ

○国務大臣(岡田良平君) 農科大学ヲ設ケマスルニ付テハ、其土地ノ風土、氣候其他周囲ノ事情ヲ十分ニ考慮ヲ致シマシテ、其地ヲ選定シナケレバナラヌト云フコトハ是ハ寔ニ御同感デアリマス、夫故ニ九州農科大学ヲ設置致シマスルニ付テ、是ハ何処ニ置クベキモノデアルカト云フコトニ付テハ、当局トシテハ十分ニ考慮致シタノデアリマス、如何ニモ御話ノ通りニ、鹿児島ハ農科大学ノ地トシテハ、色々都合ノ好イ所ノ事情ヲ沢山ニ備ヘテ居ルノデアリマシテ、御話ノ通り南洋ニ属スル所ノ研究ニ付テハ、鹿児島ハ他ニ見ルコトノ出来ナイ便宜ノ地デアルノデアリマス、此点ヲ以テ鹿児島ニ農科大学ヲ置クト云フコトハ、適當デアルヤウニモ考ヘタノデアリマス、然ルニ又一方カラ考ヘマスルト云フト、此農科大学ニ於テ研究スベキ事柄ト云フモノハ、余程多方面ニ亘ツテ居ルノデアリマシテ、其研究スベキ事項ハ、他ノ分科大学ノ共助ニ待ツコトガ甚ダ多イノデアリマス、例ヘバ農芸化学ノ如キモノハ、理化学ノ研究ニ待ツト

云フコトガ非常ニ多イノデアリマス、或ハ農業土木ト云フヤウナモノニ付テハ、工科大学共助ニ待ツコトガ非常ニ多イノデアリマス、又林学ノ方ニ付テモ、或ハ数学、或ハ土木ト云フヤウナ事柄ニ於テ、他ノ分科ノ共助ニ待ツ所ガ非常ニ多イノデアリマス、是等ヲ挙ゲテ見マスルト、ドウモ農科大学ヲ单独ニ他ノ分科ト引離シテ置クト云フコトハ、甚ダ不利益デアアル、又初メ福岡ニ大学ヲ置キマシタ所ノ予定計画モ、総合大学ヲ彼地ニ置クト云フ予定デ置イタノデアリマスカラ、ドウモ福岡ニ設置スル方ガ当然デアアルマイカト云フ考ヲ以テ、福岡ニ農科大学ヲ置クトニ定メタノデアリマス、併ナガラ鹿児島ハ農業上ノ研究ニ付テ、色々有利ナ位置ニアルト云フコト、殊ニ熱帯ノ暖潮ニ近イノデアリマスカラ、此暖潮ノ動植物等ニ付テノ研究等ノ点ニ於テ、有利ナ位置ニアルト云フコトハ争ハレヌコトデアリマスカラ、鹿児島ノ農林学校ト云フモノハ、将来是等ノ有利ナ点ヲ、總テ利用スルヤウナ工合ニ十分ノ發展ヲ図ルコトニシタイ、即チ鹿児島ノ有スル所ノ有利ナ位地ト云フモノハ、決シテ之ヲ無駄ニシナイヤウニ、今ノ農林学校ヲ以テ之ヲ利用セシメヤウ、ソレト同時ニ学問ノ教授ヲ要スル農科大学ハ、福岡ニ置クト云フコトニ致スガ、最モ宜カラウト云フノデ、其様ニ決定シタ次第デ御坐イマス

第二節 農学部の創設

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

一七七 九州帝国大学各学部ニ於ケル講座ニ関スル件中改正

〔官報〕第二四三三号 一九二〇（大正九）年八月二八日

朕大正八年勅令第十七号九州帝国大学各学部ニ於ケル講座ニ関スル

件中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

大正九年八月二十七日

内閣総理大臣 原 敬

文部大臣 中橋徳五郎

勅令第三百四十一号

大正八年勅令第十七号中左ノ通改正ス

工学部ノ部中「機械工学」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ、「応用化

学」ノ下「五講座」ヲ「六講座」ニ改メ「地質学」講座ノ次ニ「造

船学」講座」ヲ加フ

工学部ノ部ノ次ニ左ノ如ク加フ

農学部

農学 二講座

動物学 二講座

植物学 一講座

一七八 九州帝国大学農学部ニ農学科設置授業開始

〔官報〕第二四三三号 一九二〇（大正九）年八月二八日

文部省令第二十二号

九州帝国大学農学部ニ農学科ヲ置キ大正十年四月ヨリ授業ヲ開始ス

大正九年八月二十八日

文部大臣 中橋徳五郎

一七九 農学部長委任事項

（一九二〇（大正九）年九月一〇日達）

農学部長委任事項

農学部長ヘ委任事項左ノ通相定ム 但第三ハ決行後即時開申スヘシ

第一 判任官以下職員ノ事務分課ヲ命スルコト

第二 判任官以下ノ諸届ニ関スルコト

第三 俸給月額四拾円未満ノ雇員ノ進退並四拾円以上ノ雇員ノ解職

ニ関スルコト

第四 雇員以下ノ除服出仕ヲ命スルコト

第五 巡視小使給仕職工等ノ進退ニ関スルコト

第六 出勤簿ヲ整理ノコト

第七 宿直ニ関スルコト

第八 予算ノ範圍内ニ於テ一廉五百円未満ノ金額ヲ以テ物品ヲ購入

シ若クハ備品ノ修繕ヲ為スコト

第九 価格五拾円以下ノ不用物品払下ノコト

第十 価格拾円以下ノ寄贈品ヲ処理シ及総長ノ名ニ於テ謝状ヲ發ス

ルコト

〔註〕『九州帝国大学例規要覽』大正十四年。

一八〇 農学部処務細則

(一九二〇(大正九)年九月二一日制定)

農学部処務細則

第一条 農学部ニ庶務掛及會計掛ヲ置キ事務ヲ分掌セシム

第二条 各掛ニ掛長ヲ置キ書記ノ中ヨリ学部長之ヲ命ス

掛長ハ上官ノ命ヲ承ケ掛ノ事務ヲ掌理ス

第三条 掛員ハ掛ノ事務ニ服ス 但シ上官ノ命アルトキハ他掛ノ事

務ヲ助ク

第四条 主掌事務ニシテ他掛ニ關聯スルモノハ合議スヘシ

第五条 農学部ノ事務ハ学部長ノ決裁ヲ經ルニアラサレハ施行スル

コトヲ得ス

第六条 事務ノ分掌左ノ如シ

庶務掛

一 職員ノ進退身分ニ關スルコト

二 学部長ノ官印及学部印ノ管守

三 教務ニ關スルコト

四 学生ニ關スルコト

五 公文書類ノ收受發送ニ關スルコト

六 統計報告ニ關スルコト

七 儀式ニ關スルコト

八 宿直ニ關スルコト

九 他掛ノ主掌ニ属セサルコト

會計掛

一 歳入歳出ノ予算決算ニ關スルコト

二 歳入歳出ノ收支ニ關スルコト

三 不動産ノ管理ニ關スルコト

四 物品ノ出納保管ニ關スルコト

五 学部内ノ取締ニ關スルコト

六 傭人ノ進退及取締ニ關スルコト

七 農場及演習林ニ關スルコト

第七条 文書ハ總テ庶務掛ニ於テ接受シ收受件名簿ニ登記シ收受ノ

番号及月日ヲ記入シ直ニ主務掛ニ配布シ取扱者ノ受領印ヲ受クヘ

シ

親展書ハ封緘ノ儘宛名ニ配布スヘシ

第八条 配付ヲ受ケタル文書ハ速ニ之ヲ調査シ処分案ヲ起草シ決裁

ヲ請フヘシ

事件ノ種類ニ依リ直ニ処分案ヲ起草スル能ハス又ハ処分ヲ要セス
ト認ムルトキハ学部部長ニ供閲シ指揮ヲ受クヘシ

第九条 決裁済ノ文書ニシテ他ニ發送スヘキモノハ庶務掛ニ回付シ
同掛ニ於テ浄書發送スヘシ

但シ計算書統計表又ハ図面ノ類ハ各主任ニ於テ浄書シ庶務掛ニ回
付スヘシ

第十条 庶務掛ニ於テ文書ヲ發送スルトキハ發送件名簿ニ登記スヘ
シ

第十一条 完結ノ文書ハ各掛ニ於テ類別編纂シ之ヲ保存スヘシ

第十二条 收受及發送スヘキ文書ニハ左ノ符記番号ヲ記入スヘシ
農職第 号 職員ノ進退身分ニ関スル文書ニ附スルモノ
農庶第 号 庶務掛ニ属スル文書ニ附スルモノ

農会第 号 会計掛ニ属スル文書ニ附スルモノ
第十三条 番号ハ符記別ニ之ヲ附シ毎年一月二起リ十二月二止ム
〔註〕『九州帝国大学例規要覽』大正十年。

一八一 九州帝国大学農学部規程

(一九二〇(大正九)年九月二日制定)

農学部規程

第一章 入学

第一条 九州帝国大学通則第六条ニ依リ本学部ニ入学志望ノ者ハ入
学願書ヲ高等学校ヲ經テ差出スヘシ

第二条 前条入学志望者ノ数収容予定人員ヲ超過シタルトキハ高等
学校在学中ノ学業成績性行並健康状態ニ付考査ノ上入学者ヲ定ム

第三条 左ニ記載スル者ハ九州帝国大学通則第六条及第七条第一号
乃至第三号ノ入学志望者ヲ収容シ尙欠員アル場合ニ限り通則第七
条第四号ニ依リ入学檢定試験ヲ行ヒ合格シタルトキハ入学ヲ許可
ス

一、高等学校大学预科第二部甲類、乙類卒業者及之ト同等以上ノ
資格アル者

二、専門学校程度ノ農林学校卒業者

三、高等師範学校本科理科卒業者

第二章 学期

第四条 学年ヲ分チテ二学期トス第一期ハ四月一日ヨリ十月三十
一日ニ至リ第二期ハ十一月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル

第三章 学科及修学

第五条 本学部ニ農学科ヲ置ク

第六条 修学科目ヲ必修科目及選択科目トス其ノ科目並最短在学期
間ニ於ケル標準時間左ノ如シ

農学科

第二章 農学部の創設

育種学	作物学	△統計学	△土木工学大意	機械工学大意	細菌学	応用昆虫学	気象学	動物学	植物学	肥料学	土壌学	地質学及岩石学	学 科 目	
		一	二	二	一	一	二	二	二	二	二	二	第一 学期	第一 年
		二	二	二	一	二		二	二	二	一	一	第二 学期	
	二												第一 学期	第二 年
一	二												第二 学期	
	二												第一 学期	第三 年
	二												第二 学期	

△熱帯農業論	農業経済学	農政学	農業法律学	農業工学	法学通論	経済学	蚕体病理学	蚕体生理学	養蚕	園芸学	家畜飼養論	畜産学	植物病理学	遺伝学
											二			
											一			
				二	二	二		一	二	二		三	二	二
				二	二	二		一		二		三	二	
二	二	二	二											
一	一	一	一											

特別講義						
植物学実験	二回	二回				
昆虫学実験						
動物学実験	一回	一回				
農学実験	一回	一回	三回	三回	三回	三回
経済学演習			一回	一回	一回	一回
農業実習	一回	一回	一回	一回	一回	一回
合計	二二	一八	二〇	一九	二二	一〇

備考

△印ヲ附セルハ選択科目トス

実験、演習、実習ハ毎回二時間以上トス

特別講義ノ科目及時間数ハ各学期ノ始迄ニ公示ス

第七条 学生ハ聴講又ハ実習ノ始及其ノ終ニ於テ本学部制定ノ修学簿ヲ当該学科担任ノ教官ニ提出シ修学始ノ許可及修学終ノ証明ヲ受クヘシ

第八条 学生ノ在学期間ハ六学年ヲ超ユルコトヲ許サス但シ休学シタル期間ハ之ヲ算入セス

第四章 試験

第九条 試験ハ学期ノ終ニ施行シ其ノ科目及期日ハ二週間前ニ之ヲ揭示ス

第十条 試験ヲ受ケントスル者ハ試験期日揭示後一週間以内ニ担任教官ヘ申出ツヘシ

第十一条 試験ノ成績ハ各科目ニ就キ合格不合格ノ二トス

第十二条 合格シタル科目ニ対シテハ希望ニ依リ証明書ヲ与フルコトアルヘシ

第五章 学士試験

第十三条 大学令第十条ニ依リ学士ノ称号ヲ得ントスル者ノ為メニ学士試験ヲ行フ

第十四条 学士試験ヲ分子テ科目試験及論文試験トス

第十五条 科目試験ハ第六条ニ規定セル必修科目ニ就キ之ヲ行フ

第十六条 論文試験ハ教官ノ承諾ヲ得タル特別ノ問題ニ付学生ノ提出シタル論文ノ審査及口頭試問トス論文試験ハ科目試験ノ全部ニ合格シタル後ニ非サレハ之ヲ行ハス

第十七条 科目試験ハ第九条及第十条ノ規定ニ依リ之ヲ行フモノトス

第十八条 学士試験ノ成績ハ合格不合格ノ二トス

第六章 選科生

第十九条 修学科目中一科目若ハ数科目ヲ選ヒ之ヲ修メントスル者ニシテ相当学力アリト認ムルトキハ選科生トシテ收容スルコトヲ

ルヘシ

第二十条 選科生ニハ第五章ヲ除クノ外正科生ニ関スル規定ヲ準用ス

第二十一条 選科生ニシテ願ニ依リ試験ヲ受ケ合格シタル者ニハ証

明書ヲ与フルコトアルヘシ

〔註〕『九州帝国大学一覽』從大正九年至大正十年。

一八二 九州帝国大学農学部要覽

(表紙)

┌

大正十三年三月

九州帝国大学農学部要覽

└

九州帝国大学農学部要覽

目次

沿革略……………一

敷地及建物……………六

農学部規程……………八

職員……………二三

講座及設備……………三一

農学部本館及分館……………三五

農芸化学本館……………三七

林学本館及分館……………三九

生物学本館……………四一

附属農場……………四三

附属演習林……………四六

紀要……………四八

学生及生徒ニ関スル諸表……………四九

目次終

図版目次

一 農学部全景……………一

二 職員写真……………一

三 職員写真……………二

四 職員写真……………三

五 農学本館……………三

六 作物学研究室……………六

七 畜産学研究室……………七

八 農芸化学研究室……………八

九 農芸化学研究室……………九

- 十 農芸化学実験室
 - 十一 醱酵菌学実験室
 - 十二 農芸化学図書室
 - 十三 生物学本館
 - 十四 生物学第一実験室
 - 十五 植物学実験用硝子室
 - 十六 附属農場全景
 - 十七 附属農場牛舎
 - 十八 附属農場果樹園
 - 十九 朝鮮演習林
 - 二十 台湾演習林
 - 二十一 樺太演習林
 - 二十二 糟屋演習林及早良演習林
 - 二十三 農学部建物配置図
 - 二十四 附属農場建物配置図
- 九州帝国大学農学部要覽
- 沿革略
- 九州帝国大学農学部ハ大正八年二月設置セラル是ヨリ先九州帝国大学ニ農科大学ヲ増設シ綜合大学ノ実ヲ挙クルニ於テ一步ヲ進メントスルノ議盛ナルヤ福岡県ハ金百參拾五万円ヲ寄附シテ其資ニ供セン

トスルノ意ヲ致セリ是ニ於テ政府ハ之ヲ基礎トシテ農科大学ヲ設置スルニ決シ大正七年度ヨリ同十二年度ニ至ル六ヶ年ノ継続事業トシテ大正七年度予算ニ其創立費ヲ計上シ帝國議會ノ協賛ヲ経テ之カ確定ヲ見ルニ至レリ是ニ於テ創立準備ニ着手シ大正十年四月ヨリ授業ヲ開始セリ而シテ建築工事進行中物価著シク騰貴シ当初ノ予算ニテハ不足ヲ生スルニ至リタルヲ以テ大正十年度乃至十二年度ニ於テ政府支出金八拾四万六千式百六拾円ヲ増額セラレタリ即チ創立費総額金式百拾九万六千式百六拾円ナリトス

今年次ヲ逐ヒテ沿革ノ大略ヲ示セハ次ノ如シ

大正七年

四月 朝鮮總督府勸業模範場技師本田幸介及農事試験場技師兼東京帝国大学農科大学教授古在由直ニ農科大学創立委員ヲ囑託セラル

大正八年

二月 勅令第十三号ヲ以テ九州帝国大学ニ農学部ヲ設置セラル

四月 東京帝国大学農科大学教授河合鍾太郎ニ本学部創立委員ヲ囑託セラル

八月 農商務省所属福岡県糟屋郡箱崎町地藏松原ナル国有林ヲ

文部省所管ニ転管ノ為熊本大林区署ヨリ其引継ヲ終了ス

大正九年

八月 勅令第三百四十号ヲ以テ九州帝国大学官制中改正セラレ

本学部ニ教授五人、助教授五人、助手八人、書記二人ヲ置カル
 ○勅令第三百四十一号ヲ以テ農学第一、農学第二、動物学
 第一、動物学第二、植物学ノ五講座ヲ置カル○文部省令第二
 十二号ヲ以テ農学部ニ農学科ヲ置キ大正十年四月ヨリ授業開
 始ノ旨公布セラレ

学生作業室等ノ工事ニ着手ス○教授加藤茂苞農場長ニ補セラ
 ル
 九月 生物学本館建築工事竣ル
 大正十一年

九月 本学部事務所ヲ本部内ニ置キ総長眞野文ニ農学部長ノ事
 務ヲ取扱フ○事務所生物学本館及農学科附属実験室建築ノ工
 ヲ起ス○処務細則ヲ定ム

二月 文部省令第八号ヲ以テ本学部ニ農芸化学科及林学科ヲ置
 キ本年四月ヨリ授業開始ノ旨公布セラレ○本学部規程中選科
 ニ係ル条項及毎週教授時数等ヲ改正ス

十二月 農学部規程ヲ制定ス

大正十年

一月 本田幸介教授ニ任セラレ本学部長ニ補セラレ○本田幸介、

古在由直及河合鉢太郎本学部創立委員ノ囑託ヲ解カル

三月 本学部敷地内ニ新築中ノ事務所竣工セシニ依リ移転ス○

農学科附属実験室落成ス

四月 勅令第二百二十号ヲ以テ九州帝国大学官制中改正セラレ本

学部ニ教授五人、助教授五人、助手十人、書記一人ヲ増加セ

ラル、ト同時ニ附属農場並ニ農場長ヲ置カル○勅令第二百二十

一号ヲ以テ本学部ニ植物病理学、畜産学、経済学、農政学第

一、生物化学及林学第一ノ五講座ヲ置カル○農学科附属実験

室ヲ講義室、学生控室及教授室等ニ充テ授業ヲ開始ス

五月 附属農場事務所ノ新築工事ヲ起シ尋イテ収納舎、農具室、

大正十二年

三月 本学部規程中学科目及毎週教授時数ヲ改正ス

五月 教授大工原銀太郎朝鮮總督府勸業模範場技師ニ転任同時

ニ本学教授ニ兼任セラレ学部長代理ヲ免セラル○教授加藤茂

五月 農学本館新築工事竣ル○勅令第二百九十号ヲ以テ九州帝

国大学官制中改正セラレ本学部ニ教授十人、助教授六人、助

手十三人、書記一人ヲ増加セラルト同時ニ附属演習林ヲ設

置シ演習林長ヲ置カル○勅令第二百九十一号ヲ以テ本学部ニ

養蚕学、農業工学、農学第三、園芸学、農芸化学第一、農芸

化学第二、農産製造学、林学第二、林学第三、林学第四ノ十

講座ヲ増加セラル○教授本田幸介帝室林野管理局長官ニ転任

同時ニ本学教授ニ兼任セラレ学部長タルコト故ノ如シ

九月 教授大工原銀太郎本学部長不在中代理ヲ命セラル○教

授植村恒三郎附属演習林長ニ補セラレ

苞附属農場長ヲ免セラレ本田農学部長不在中代理ヲ命セラル

○教授久保健磨附附属農場長ニ補セラル○勅令第二百二十七号

ヲ以テ九州帝国大学官制中改正セラレ本学部ニ教授五人、助
教授三人、助手六人ヲ増加セラル○勅令第二百三十二号ヲ以

テ本学部ニ畜産学第二、経済学農政学第二、気象学統計学、

農芸化学第三、林学第五ノ五講座ヲ増加セラル

六月 農芸化学本館新築工事竣ル

○敷地及建物

本学部ノ敷地ハ福岡県糟屋郡箱崎町ニ在リ其面積合計四万八千三百

一坪ニシテ内一万二千八百六十一坪ハ九州帝国大学寄宿舎用地トシ

テ往年国有林ヨリ組替ヘラレタルモノニシテ二万四千六百六十七坪

ハ国有林ノ組替ニ係リ一万七百七十三坪ハ民有地ヲ購入セリ

建物ハ大正九年九月ヨリ工ヲ起シ現ニ竣工セシ建物ハ事務所、農学

科附属実験室、生物学本館、農学本館、農芸化学本館等ニシテ煉瓦

造ハ倉庫、汽缶室、蒸溜水採取室、農産製造室等九十七坪余木造ニ

千四十九坪余ナリ此外現ニ工事中ノモノハ林学本館及分館、養蚕室

及附属建物等ニシテ之ヲ建築ニ関係シタル者ハ九州帝国大学技師倉

田謙同坂部保治ノ二名トス今既成建物ノ主要ナルモノヲ掲クレハ左

ノ如シ

一、事務所

木造二階建

七八坪余

学部長

○職員

(同職中ノ氏名ハ
就職ノ順ニ依ル)

教授農学博士農学士

本田幸介

一、同上

木造平家建

八七坪余

一、物置

木造平家建

四六坪

一、事務所附属小使室等

木造平家建

二九坪余

一、農学分館(附属実験室)

木造二階建

一一一坪

一、啣筒室

木造平家建

五八坪

一、汽缶室

煉瓦造平屋建

四〇坪

一、生物学本館

木造二階建

四二六坪余

一、暗室消毒室

木造平家建

三四坪余

一、倉庫

煉瓦造二階建

三〇坪

一、農学本館

木造二階建

四四四坪

一、同上

木造平家建

一一七坪余

一、農芸化学本館

木造二階建

四一九坪

一、同上

木造平家建

一八〇坪余

一、農産製造室

煉瓦造平家建

二二坪

一、門衛所其他

木造煉瓦造平家建

二五坪余

○農学部規程

(中略)

第二章 農学部への創設

(兼)	事務官	坂根友敬	法学通論	講師	樋田豊太郎
(兼)	農学本館		園芸学	講師	田中長三郎
(兼)	教授農学博士農学士	本田幸介	実習指導	嘱託	南波清三郎
(兼) 作物学汎論	教授農学博士農学士	安藤廣太郎		助手	小早川九郎
農学第二講座担任	教授農学博士農学士	加藤茂苞		助手	瀧口義資
畜産学講座担任	教授	久保健磨		助手	中村惣次郎
農業工学講座担任	教授	田中貞次		助手	四宮八郎
経済学	助教授	森順治郎		助手	安井正雄
農政学	助教授農学士法学士	澤村康		助手	竹下勇藏
園芸学	助教授	伊藤壽刀		助手	小坂博
農学	助教授	盛永俊太郎	生物学本館	助手	細見健夫
畜産学	助教授	丹下正治	植物学講座担任	教授	瀨理一郎
農政学	助教授	伊藤兆司	植物病理学講座担任	教授	中田覺五郎
農林物理学	助教授	鈴木清太郎	動物学第一講座担任	教授	大島廣
経済学	助教授	竹内謙二	動物学	助教授	小山準二
畜産学	助教授	佐々木清綱	植物学実験指導	助教授	小島均
作物学	助教授	高山卓爾	養蚕学	助教授	川口榮作
気象学	講師理学博士理学士	岡田武松	昆虫学	助教授	江崎梯三
気象学	講師	池上稻吉	養蚕学	講師農学博士農学士	田中義磨
畜産学	講師	山田勝一		助手	瀧元清透

畜産学第一講座	(畜産学通論)
畜産学第二講座	(畜産学各論)
経済学農政学第一講座	(経済学)
経済学農政学第二講座	(農政学)
農業工学講座	(農業工学)
気象学統計学講座	(気象学、統計学)
動物学第一講座	(動物学)
動物学第二講座	(昆虫学)
養蚕学講座	(養蚕学)
植物学講座	(植物学)
植物病理学講座	(植物病理学)
農芸化学第一講座	(土壌学、肥料学)
農芸化学第二講座	(家畜營養学、酪農学)
農芸化学第三講座	(食品化学)
生物化学講座	(生物化学)
農産製造学講座	(農産製造学)
林学第一講座	(森林經理学)
林学第二講座	(森林土木学、砂防工学)
林学第三講座	(造林学、森林保護学)
林学第四講座	(森林管理學、林政学)
林学第五講座	(森林化学工芸)

農学ハ一種ノ応用科学ナリト雖モ授業ノ方針余リニ応用ニ偏スルトキハ大学トシテ存立ノ意義ヲ喪フヘク又若余リニ理論ニ失セシカ農界教導ノ本義ヲ没却スルニ至ラン故ニ本学部ハ克ク其中庸ヲ保チ理論ト實際ト併セ咀嚼熟達セシメ進ンテ研究ニ従事セントスルモノニモ亦出テ、実社会ニ活躍セントスルモノニモ共ニ遺憾ナカラシメンコトヲ期ス

學術ノ進歩ハ年ヲ逐ヒテ専門分化ノ傾向ヲ助長スルコト言フ俟タスト雖徒ニ微ニ入り細ヲ穿チ講義ノ種目ヲ増大シ時間ヲ延長シ以テ學生ノ負担ヲ過重ナラシムルハ却ツテ天赋ノ才器ヲ萎靡セシムルノ虞アルカ故ニ本学部ニ於テハナルヘク課目並ニ時間ノ数ヲ少クシ比較的実験並ニ実習ノ時間ヲ多クシ學生ヲシテ自習研究ノ余地ヲ裕ナラシメントス

學術的研究ノ実績ヲ挙クルハ大学ノ生命トスル所ナルカ故ニ本学部ニ於テハ特ニ意ヲ此点ニ注キ可及的多クノ經費ヲ研究ノ為ニ割クト共ニ教官ノ研究時間ヲ多カラシメ又業績ノ発表ニハ能フ限りノ便宜ヲ図ルヲ旨トセリ

本学部ハ創立後日尚浅クシテ備付ノ図書、器具、概械、標本等完備ノ域ヲ距ルコト尚遠キモノアリト雖既ニ購入セル器具、機械類ハ概ネ最新式ノモノヲ撰ヒ図書ハ主要ナル単行書ノ外特ニ重キヲ雜誌類ノ完備ニ置キ標本、掛図等ハ一部已ムヲ得サルモノハ之ヲ購入スルモ事情ノ容ス限り各教室自ラ調製シテ其目的ニ適合セシムルヲ旨ト

ス学部内殆ント各室ニ水道、ガス、電気、暖房装置ヲ備ヘ殊ニ電気ハ東邦電力株式会社ヨリ六十キロノ供給ヲ受ケ独リ照明ノ目的ノミナラス孵籠、恒温槽、パラフィン熔融器、電話等ノタメニ昼間線ヲ併設ス電話ハ共電式ニシテ容量一〇〇回線單式交換機二座席ノモノ一台ヲ備ヘテ市内電話機トノ連結ヲ可能ナラシム

又各教室実験用トシテ七馬力半ノモートルジエネレータヲ備ヘ直流電気ヲ供給スルヲ得セシム

ガスハ西部合同瓦斯会社ヨリ供給ヲ受ケ一〇〇灯計量器ヲ經テ使用ス

給水タンクハアポロ式ニシテ径六呎長三十六呎ノモノニ基ヲ備フ給水ポンプハ十五馬力電動機直結ノタービンニシテ其水頭ハ二二〇呎揚水量ハ一時間ニ付三百石ナルモノニ台ヲ備ヘ井戸ハ径十二呎深サ十六呎ニシテ二個ヲ有ス

暖房ハワンパイプ式ニシテコンデンセーションボムプ三台ト径七呎長三十呎常用汽圧一〇ポンドノランカシヤボイラー一基トヲ備フ

○農学本館及分館

室ノ区分

本館ニ於テハ各講座ニソレ々教授室及研究室ヲ有スルノ外作物学標本室、作物学特別実験室、実験用暗室、定温器室、園芸学標本室、園芸学実験室、畜産学標本室、畜産学実験室、小家畜飼育室、農業

工学標本室、農業工学製図室、農業機械実験室、經濟演習室、描画室、職員食堂、講義室等アリ

外二分館トシテ農学科附属実験室アリ
設 備

一、図書

和洋単行書約四千五百十九部、各方面ニ於ケル調査資料、報告書類約九百部、雑誌和洋合計百四十一種、其中初号ヨリ完備セルモノ十八種ナリ

二、標本類

標本ハ目下蒐集中ニ属シ其數未タ多カラス主ナルモノハ世界各国ニ於ケル米麦其他ノ作物標本凡一千二百点、各国産羊毛標本若干汽缶及ダイナモ模型等ナリトス

三、器具機械類

本館ニ於ケル諸講座ニ属スル器具機械ノ主ナル種目ヲ挙クレハ天秤、穀実、試験用諸機械、発芽試験器、顕微鏡、解剖顕微鏡、マイクローム、パラフィン熔融器、写真器、遠心分離器、レフラクトメータ、バタ製造用器、カゼインテスター、定温器、孵卵器、剪毛機、乳脂檢定器、消毒器、家畜体尺測定器、クラムミングマシン、冷蔵箱、計算器、石油發動機、セクタートラクター、揚水ボムプ、トランシット、テオドライト、レベル、流速計、自記検潮器、自器寒暖計、蒸発計、湿度計、風信計、測雲計、晴雨計、雨量計、日照計、

植物成長測定計、蛋白沈澱反応用諸機械等ナリ

○農芸化学本館

室ノ区分

各講座ニ属スル教授室、教授研究室ヲ有スルノ外助教教授研究室、講義室、特別研究室、特別実験室、図書室、醱酵菌学実験室、光学用暗室、定温器室、培養基室、蒸溜室、天秤室、試薬室等ヲ有シ学生実験室二棟、小動物飼育室、元素分析室、窒素分解室、エーテル浸出室、試料粉碎室ハ廊下ヲ以テ接続シ農産製造室、酒精醱酵室、家畜栄養研究室、蒸溜水採取室ハ隔離シテ各別ニ一棟ヲ為セリ

設 備

一、図書

図書室ニハ農芸化学研究上必要ナル図書雜誌類ヲ備フ図書ハ教室ノ創立日尚浅キヲ以テ蔵スル所未タ多カラサルモ現在ノ部数ハ洋書九百十、和書百三十三、合計千四十三部ナリ雜誌類ハ最新ノ研究成績ヲ知得スルニ欠クヘカラサルヲ以テ英、独、仏語六十一種、邦語五種、合計六十六種ヲ備ヘ其中初号ヨリ全部完備セルモノ十四種ニ及ヘリ

二、標本類

標本類ハ鉱物及岩石類六百五十、肥料及土壤類九十点、生活微生物標本、バクテリア百二十種、黴百三十種、酵母百三十種ヲ備フ其他

目下蒐集中ニ属ス

三、器具機械類

器具機械類ハ実験及ヒ研究ヲ施行スルニ辛ク当面ノ必要ヲ満シ得ルノ程度ニ過キサレトモ創立ノ当初ニアリテハ蓋シ已ムヲ得サル処ナラン今設備セル処ノ若干ヲ摘記スレハ次ノ如シ

理化学用天秤各種、瓦斯分析用装置、家畜呼吸試験設備、家畜飼養箱、小動物飼養箱、ヴァンスライク氏アミノ酸定量器、細微天秤、醱酵力測定装置、酵母純粹培養装置、水銀真空ポンプ、水素イオン濃度測定装置、ペントザン定量装置、揮発酸蒸溜装置、真空蒸発器、ポンプカロリメーター、電気燃焼炉、顕微鏡各種、分光器、偏光器、顕微鏡加温装置、プチロメーター、分子量測定装置、恒温槽、電気定温器、暗視野装置、ウルトラコンデンゾール、乾熱滅菌器、消毒釜、振盪器、標準水銀気圧計、引伸装置、撮影器、粉細器、圧濾器、土壤淘汰分析装置一式、分析用白金器具、真空ポンプ等

○林学本館及分館

室ノ区分

本館分館共二目下建築中ニ属スレトモ室ノ予定配分ヲ示セハ本館階下ニハ講義室一、教授室五、演習室、製図室、器具室、事務室、演習林、事務室及応接室ノ十三室又階上ニハ図書室、講義室、教授室二、演習室、標本室一、会議室及食堂ノ九室アリ

分館ニハ造林学実験室、同研究室、土木砂防及利用学実験室、同研究室、森林化学実験室、同研究室、森林化学工芸実験室、材料室、天秤室、滴定及脂肪浸出室及暗室ノ十一室アリ

○生物学本館
室ノ区分
本館ニハ生物学第一及第二図書室、同第一及第二標本室、同第一乃至第四実験室、同第一及第二講義室、同特別実験室、写真暗室、実験用暗室、殺菌室、職員食堂、教授室五、一般動物学研究室、動物

一、図書

図書雑誌類ハ既ニ集メ得タルモノ約千五百部ニシテ尚關係ノ文献ハ汎ク各国ヨリ蒐集センコトヲ期ス

二、標本類

材鑑其他林産物ノ標本、写真、掛図等ノ如キハ尚不充分ナルヲ免レサルヲ以テ目下之力蒐集及調製ニ努メツ、アリ

三、器具機械類

測量及製図用ノモノハ経緯儀、タキメーター、羅針儀、Y形水準儀、簡易測量器類、仏国製バロメーター、シヤイペンプラニメーター縮図器、計算器、製図器等、測樹用ノモノハデンドロメーター及測高器数種、独逸製其他ノ輪尺数種、瑞典製生長錐等、造林用ノモノハ定温器、発芽器、独逸製造林用器具一式、森林利用ニ関スルモノハ独逸製伐木、造材、転材用器具機械、フリードリツヒ氏測容器等、又森林植物、木材工芸の性質其他ノ研究及実験用ノモノハ顕微鏡、携帯用顕微鏡、解剖顕微鏡、ミクロトーム、又講義室ニハエビデイスコープヲ備ヘ教授用ニ供ス

二附属舎ハ目下建築中ニ属ス

設 備

一、図書

第一図書室ニハ主トシテ動物学、昆虫学及養蚕学ニ関スル図書ヲ蔵シ単行書九百三十二部、雑誌七十八種、雑誌ノ中初号ヨリ全巻ヲ備ヘタルモノ十八種アリ、第二図書室ニハ主トシテ植物学及植物病理学ニ関スル図書ヲ蔵シ単行書四百九十一部雑誌二十九種、就中初号以来完備セル雑誌十三種トス

二、標本類

動物標本三百余点ノ外多数ノ顕微鏡標本ヲ備ヘ昆虫類ニハ分類学標本トシテ邦産ノモノ二千余种アリテ代表的ノモノヲ網羅シ外ニ外国産三百余种、供覧用標本三十五箱、酒精用標本約百個アリ植物腊葉

標本ハ其數約五千個ニシテ約百五十科、七百屬、一千五百種ヲ包括ス、又病害ノ腊葉標本ハ三百余种ニシテ病原菌ノ培養五十余种ヲ有ス

三、器具、機械其他ノ設備

現在備付ケアル器具機械ノ主ナルモノヲ挙クレハ顕微鏡解剖顕微鏡、水平顕微鏡、ミクロトーム、パラフィン熔融器、電気孵籠、細微解剖器、顕微鏡写真装置、垂直撮影装置、写真引伸装置、植物運動自記装置、植物廻転器、分光器、偏光器、ニコル氏屈光装置、暗視野装置、温度及湿度自記装置、計算器、電気生理研究用器械、乾熱殺菌器、コツホ消毒器、高圧殺菌器、アーノルド消毒器、冷蔵庫、接種箱、接種框、恒温槽、遠心分離器等是ナリ

其他第一講義室ニハライツ社製方能映写装置ヲ備ヘ実体、透画兩様ノ幻灯及顕微鏡像映写ノ用ニ供ス
又植物園約一千五百坪ヲ有ス

○附属農場

農場ハ福岡県糟屋郡仲原村ニ在リ總面積二十八町四畝九步ニシテ内一部大正八年、同九年ノ兩年度中内務省ヨリノ保管転換ニ係ルモノ、外ハ悉ク大正七年ヨリ同九年ニ亘リテ仲原村民有地ヲ購入セルモノニ属シ大正十年度之カ耕地整理ニ着手シ同十一年度略ホ之ヲ完了セリ耕地整理後ニ於ケル地種別面積左ノ如シ

種別		面積
耕地		畝步
畑	田	二〇九一、〇三
内	畑	一一二四、二六
山	林	九六六、〇七
宅	地	四一、一九
溜	池	二八九、一五
溝	渠	一四、一三
道	路及堤防	一〇三、〇〇
計		二六四、一九
		二八〇四、〇九

当場ハ地勢概ネ東方ヨリ西方ニ向ヒテ極メテ緩ナル傾斜ヲナシ水路亦從テ場内ヲ東ヨリ西ニ貫流ス水源ハ主トシテ之ヲ約半里ノ東方駕輿丁池ニ仰キ概シテ田面涸渴ノ虞少シ土性ハ田ハ概シテ沖積層ニ属スレトモ畑ハ洪積層ニ属スルモノ多シ今大正十二年八月末日ニ於ケル耕地ノ利用狀況ヲ示セハ左ノ如シ

直營地	面積
普通及特用作物	畝步
蔬	二七七、二九
飼料作物	一五七、〇八
菓	二七一、〇〇
樹園	一四三、一三

種別		構造	棟数	坪数	種別	数量
本館	木造二階建	一	八四、〇〇	耕種用	五七〇	
作業室	木造平屋建	一	一六八、〇〇	調整用	一六五	
收納舎	同	一	一四二、〇〇	飼畜用	七三	
牛舎(附牧夫室)	同	一	一二七、〇〇	製造用	一〇七	
豚舎(牝用)	同	一	四二、〇〇	病虫害防除用	五六	
豚舎(牡用)	同	一	一〇、五〇	其他	四八四	
貸付地			五三一、〇一	井戸	二、二五	
田			二、〇九一、〇三	揚水機室	二、〇〇	
田計				浴室	三、五〇	
田計				便所	五、五〇	
田計				宿直室及小使室	一、〇〇	
田計				堆肥舎	六三、〇〇	
田計				畜産製造室	三二、〇〇	
田計				飯事務所	二九、〇〇	
田計				羊舎	一六、五〇	
田計				桑園	七六、二一	
田計				林業苗圃	三九、二六	
田計				水稲	九六六、〇七	
田計				蔬菜	一六八、二七	
田計				草	五、一二	
田計				計	四一九、一六	
田計				計	五九三、二五	
田計				計	一、五六〇、〇二	
田計				計	七三九、二五	

建物ハ大正九年度中ヨリ之カ建築ニ着手シ目下竣成セルモノ左ノ如シ

此他建築予定ノモノ農産製造室、鶏舎、煙烟室、人工交配室、各一棟及官舎若干棟ナリ
農具ハ未タ完備スルニ至ラス大正十二年八月末日ニ於ケル種類別數量ハ僅ニ左ニ掲クルモノノミニ過キス

計

一、三五五

当農場ニ於テ教授ノ研究並ニ学生生徒ノ実験実習ヲ行フ現在業務ヲ作物、園芸、畜産、農業工学及経理ノ五部門ニ分チ各担任ヲ置キテ之ヲ処理ス

○附屬演習林

附屬演習林ハ総テ五箇所ニシテ福岡県内ニ在ルモノヲ糟屋演習林及早良演習林トシ台湾ニ在ルモノヲ台湾演習林朝鮮ニ在ルモノヲ朝鮮演習林樺太ニ在ルモノヲ樺太演習林ト称ス其面積通計五万七千七百三十三町歩ナリ

一、早良演習林ハ其面積五十五町歩福岡県早良郡姪浜町及同郡壹岐村ニ跨リ今津湾頭ノ一角ヲ占メ防風保安林ナリ大正十一年十月農商務省ヨリ移管セラレ専ラ學術上ノ参考並ニ研究ニ資ス

二、糟屋演習林ハ其面積約三百六十九町歩福岡県糟屋郡篠栗村勢門村及久原村ニ跨リ福岡市外吉塚駅ヨリ分岐セル篠栗線ニヨリ凡二十分ニシテ到達スルコトヲ得ヘシ本林ハ主トシテ學術上ノ研究並実習ニ供シ傍ラ模範的林業ノ経営ヲナスヲ目的トス本林ハ又早良演習林ト共ニ大正十一年十月農商務省ヨリ移管セラレタリ

三、朝鮮演習林ハ其面積約二万八千八百四町歩慶尚南道河東郡及山清郡ニ跨リ大正元年十二月朝鮮総督府ヨリ貸付セラレタル智異

山南方一帯ノ地ニシテ海拔三千尺乃至六千尺ノ間ヲ占メ南鮮唯一ノ林相地ナルヲ以テ内鮮ノ植物帯ノ関連ヲ研究スルニ極メテ重要ナル森林ナリ地勢一般ニ峻峻ニシテ国土保安及治水上重要ナル土地ナレハ専ラ林相ノ改善ト共ニ無立木地ノ植栽ヲ企劃シ大正五年度林内ヲ山清、河東ノ二区ニ分チ山清郡矢川面糸里及河東郡河東面邑内ニ看守駐在所ヲ置キ保護取締ニ従事セシメ又大正八年河東郡岳陽面及山清郡矢川面ニ苗圃ヲ設ク

四、台湾演習林ハ台北州文山郡石碇庄乾溝後坑仔流域約二千町歩ヲ占メ大正二年二月台湾総督府ヨリ移管セラレ

五、樺太演習林ハ樺太敷香附近ホイエ川流域ヲ占メ其面積二万五千五百町歩ナリ大正三年四月樺太庁ヨリ移管セラレタリ

○紀要

本学部ニ於ケル研究ノ成績ハ農学部紀要ニ於テ発表ス紀要ハ凡ヘテ欧文ヲ以テシ第一巻第一号ハ既ニ大正十二年三月出版セラレ第二号ハ目下印刷中ニ属ス毎号出版部数ハ七百部ニシテ其大部分ハ内外諸官庁、大学、諸学校、研究所等ニ無償ヲ以テ配付シ一部分ハ有償ヲ以テ希望者ニ頒ツモノトス

○学生及生徒ニ関スル諸表

九州帝国大学農学部学生生徒人員表(大正十二年十二月一日調)

第二章 農学部の創設

三重	群馬	長崎	兵庫	大阪	京都	府県別 学生 生徒	種別	
							学生	生徒
	一		一		一	学生	農	学
						生徒	学	科
	一	一	一	一		学生	農	芸
一		一				生徒	化	学
二			一			学生	林	学
						生徒	学	科
二	二	一	三	一	一	学生	計	
一		一				生徒		

九州帝国大学農学部学生生徒府県別表(大正十二年十二月一日調)

備考 本表中△印ハ外国人

合計	林学科	農芸化学科	農学科	種別	
				学生	生徒
△ _一 二 _二	六	△ _一 一 _一	五	第二	年
△ _一 二 _二	三	△ _一 一 _一	八	第二	年
二			二	第三	年
△ _二 四 _六	九	△ _一 二 _二	一五	計	
一	三	四	四	選	科
一	三	四	四	計	
△ _一 五 _七	一 _二	△ _一 二 _六	一 _九	總	計

朝鮮	鹿児島	宮崎	熊本	大分	福岡	愛媛	和歌山	山口	島根	富山	福井	秋田	山形	岩手	長野	岐阜	滋賀
	一	一	一	一	二			一		一		二	一		一		
一					一	一	一										
一	二	一		一	五	一	二	一	一				一	一			一
		一			一												
				一	一	一					一					一	一
				一	一	一	一										
一	三	二	一	三	八	一	一	三	一	二	一	二	二	一	一	一	二
一		一			三	二	一	一									

九州帝国大学農学部要覽終

種別	学 生 年 齡			生 徒 年 齡		
	最 高	最 低	平 均	最 高	最 低	平 均
農 学 科	第一 年	第二 年	第三 年	第一 年	第二 年	第三 年
	二十五年十月月	二十六年九月月	三十二年四月月	二十一年八月月	二十二年八月月	二十八年九月月
農 芸 化 学 科	第一 年	第二 年		二 十 四 年	二 十 六 年	
	二十五年十月月	二十二年一月月		二十三年六月月	二十六年	
林 学 科	第一 年	第二 年		二 十 九 年 八 月 月	二 十 年 九 月 月	
	二十四年二月月	二十六年一月月		二十二年四月月	二十四年七月月	

九州帝国大学農学部学生生徒年齢別表 (大正十二年十二月調)

支 那	合 計
二	一五
二	四
二	一四
	四
	九
	三
二	四八
	一一